

次に『阿弥陀経』について隆寛の見解を『具三心義』（『法然門下の数学』附録一一〇頁）に見れば、隆寛は「一心不乱」だけでなく「難信之法」「当信是称讚」「应当発願生彼国土」などの言葉はすべて三心であると言う。

このように隆寛は、三経のすべてに通じる心として三心を捉えていたと考えられるのである。

第五項 三心即一心

次に三心とは三つの心を別々に発すのか、と言う問題について考えてみたい。

『捨子問答』巻下に

凡ソ三心ト云ヘバトテ。別々ニ。三度起コスベキ心ニテハ無キナリ。タゞ慙ニ仏ヲ頼ミ奉テ。深ク極楽ヲ願ヒ。一心ニ名号ヲ唱ル人ノ心ヲ。三品二分テ三心トハ

説ク也

（『統浄』九、一三頁下）

とあるように、一心専念の一心を分けて三心とするような解釈がなされている。

漢語体の『具三心義』および『散善義問答』には、それぞれ「名三体一」（『法然門下の数

『学』附録一四三頁）「三心即一心々々即三心」（『隆全』二、四一頁）として回向発願心の解釈に出る。

すなわち行者の心を真実の願に回向すれば疑心あることなく疑心なければこれが深心であり、この深信の中に決定往生の想いを起こせばこれが回向発願心であると言う。『散善義問答』の別の段（『隆全』二、一八九頁）には回向発願することは至誠心が起こるからであるとしてあり、三心が別々に存在することを否定している。

隆寛は『捨子問答』（『続浄』九、一九頁）では本善の回向・本願の回向・往生の回向・還相の回向、『散善義問答』（『隆全』二、三九〇四二頁）では本善の回向・本願の回向・還相の回向と回向発願心を分類しているが、この分類において前述の三心即一心を説明する回向発願心を本願の回向と名付け、それを最も本となし正となすべきものであるとしている。ここでも本願の三心ということを中心に解釈が進められているのである。

第六項 散心・妄念の念仏

漢語体の著作には直接的には出てこないが和語体ではしばしば散心・妄念という言葉が現れ、隆寛の一つの大きな解決すべきテーマであったことがうかがわれる。すなわちこの問題を扱うことで、人間の限界を踏まえた他力重視の考え方が明確になってくるのである。